



東北振興政策のなかでいち早くテイクオフした遼寧省や好況に沸くロシアにも近く、石油もある黒龍江省に比べ、吉林省はなかなか停滞から脱することができてないという印象がありました。

しかし、ここに来て変化率では吉林省が東北の星になる可能性も出てきました。

1. とうもろこし生産大省

吉林省は面積の21%が肥沃な黒土に覆われ、中国一のとうもろこし生産基地となっています。とうもろこし生産量は同省の全農産品の約7割を占めるモノカルチャー的存在ではありますが、2006年秋からのシカゴ市場でのとうもろこし価格の急騰により、同省の農業は急に明るさを増しつつあります。国際価格は昨年末から2倍近くになっていますが、単なる投機的動きというより、バイオエタノール需要という強力な材料に裏打ちされたものであり、価格高騰は省全体の経済はもとより、依然省従業員数の46%前後を占める農業従事者の懐にも好影響をいずれもたらすことでしょう。

この2年で2回、吉林省を訪問しましたが、とうもろこしに省の命運をかける意気込みが省幹部や民間の事業者からも伝わってきました。日本側との合弁等のニーズも強いものがあります。また大手企業中心にとうもろこしを原料とした化学原料製造への外資進出も2006年以降増加しています。2006年秋に訪問した地場のとうもろこし関連企業の開発商品のとうもろこし飲料の口当たりの良さが思い出されます。

2. 自動車産業

同省の2005年工業生産増加額は約1200億元で、幅広い製造分野が展開する遼寧省の約3000億元と比較すれば見劣りしますが、今後の成長セクターである自動車関連産業が集積しつつあります。中国トップの第一汽車の本拠であり、その合弁先としてトヨタやマツダの他、欧

米企業も揃い踏み状態になっています。また部品メーカーへの優遇を図るため「自動車部品産業の発展を加速させる意見」を省政府が発表。多くの外資部品メーカーも進出してきており、2006年秋に訪問した広島県の企業はまさにその日が工場稼働の日でした。駐在員によれば将来的には中国産自動車の輸出を中国政府は本気で考えているとのこと。

吉林省は日本から見ると「奥地」というイメージを払拭できませんが、実はロシアに近く、シベリア鉄道を利用すれば製品の欧州市場への搬送も将来あり得るかもしれません。

3. チャイナプラスワンについて

一国に過度に生産拠点集中させるリスクはその通りですが、代替投資した先の国が軍事クーデターや為替規制で不安定であれば何のための分散なのとも言えます。中国主要地区に拠点を有する大企業に適用される概念でもあり、海外進出が初めての方には不向きな議論かもしれません。マスコミなどでは上海や広州等の周辺では既に労働者賃金上昇もあり、コスト面でも東南アジア優位の論評も目立ちますが、個人的見解ながら広大な中国の内陸部への展開という考えもあり得ると思います。2005年の平均月間給与の比較は以下のとおりです。

広州 / 2861元、上海 / 2662元、蘇州 / 2085元、大連 / 1822元、瀋陽 / 1660元、長春(吉林省都) / 1479元、吉林省全体 / 1036元 参考: 中国統計年鑑

4. まとめ

現在、ハルピンと大連を結ぶ高速鉄道も準備中であり、東北三省の鉄道網が高速化します。(ハルピン・大連所要時間が4～5時間に短縮)

東北三省の中間に位置する吉林省は絶好のロケーションにあり、とうもろこしと自動車に集中した省の経済運営が大成を収める可能性と併せ、見向きもされなかった極寒の地が一大経済ブームを巻き起こし、大化けするかもしれません。